

親鸞仏教センター通信

2011.
December

2011年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

第39号

慈悲のかわりめ

親鸞仏教センター研究員 花園 一実

この文章を書いている数日前、京都で予定されていた「五山送り火」に関する、ある事態がニュースとなっていた。当初京都市では、慰霊の意を込めて、東日本大震災の津波で流された、岩手県陸前高田市の景勝地「高田松原」の松を大文字で燃やす計画であったが、放射能汚染を懸念する声が相次いだことから、結局「不安を払拭することはできない」と受け入れを中止した。だが、これに多くの批判が殺到したため、一時、送り火を行うことを再び決定していた。しかし、届いた薪から新たにセシウムが検出されると、「科学的根拠から安全性を保証できない」として、結局その薪を使用した送り火は中止となってしまったのだ。

この問題について、倫理的、宗教的、さまざまな立場から意見が寄せられていた。しかし、事柄の是非はともかくとして、私は今回の出来事は人間における宗教的行為の限界を示すものではなかったかと思う。

「慈悲に聖道・浄土のかわりめあり」と始まるのは『歎異抄』の第四章である。「聖道の慈悲」とは、人間の思いによって他者を助けたいと願う心である。しかし、その心によっては思うごとくに人を助け逃げることは難しいと親鸞は言う。今回の送り火問題に見えるように、私たちは限定された身と環境を生きている以上、現実のさまざまな制約の中にあって、思い通りに人を助け逃げることはかなわない。これはどうすることもできない、私たちの背負っている身の事実である。しかし、そのことに納得がいらず、どうしても苦しまずにはいられないのも、また人間であろうかと思う。

聖道の慈悲とは、どこまでも人間の悲しみである。震災後、多くの報道が被災地の悲しみを伝えていた。愛する者を失った悲しみ、自分だけが生き残ってしまった悲しみ、親しい者の悲しみに寄り添えないことの悲しみ……。どうにかしてあげたいという人間の祈りのような要求が、どうすることもできないという無常の現実と直面したとき、私たちは立ち尽くし、嘆かずにはいられない。しかし、その嘆きの中にこそ、親鸞の言う「慈悲のかわりめ」があるのだ。

かつて、「祈りとは力及びがたき自分の発見である」と言った人がいた。言い換えれば、聖道の慈悲としての、私たちの思いによる救済への希望の芽が尽きたところに、本当に純粋な祈りがあらわれてくる、ということであろう。それは人間の思考が移り変わるのではなく、かえって慈悲それ自身の歩みというべきものである。他者を慈しみ悲しむ人間の心が、どうすることもできない身の事実と直面したとき、その悲しみは自己の内側に向かっていく。その悲しみの中で、私は私に先立って私を悲しみ続けてきた、大いなる悲しみに触れる、「慈悲のかわりめ」という時を持つのである。

「悲しみは悲しみを知る悲しみに救われ、涙は涙にそそがれる涙にたすけらる（金子大榮『歎異抄領解』）」。

親鸞が顕かにした宗教的自覚としての信心とは、この大悲によって、悲しまれ続けている自己の発見に他ならない。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑬

念々に自力に死に他力に生きる

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第43回～46回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第43回、44回、45回、46回では「第十九願（続）」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第42回から一部を紹介する。（嘱託研究員 越部良一）

■ 三願転入は一念の事実

往生というけれど、往生にも三願（第十八願、第十九願、第二十願）に応じて三往生がある。こういうふうに親鸞は見た。「双樹林下往生」から「難思往生」へ、難思往生から「難思議往生」へと、往生自身が歩む。不思議な考え方です。往生というのは、死んで往生するのではない。精神生活が歩むことが往生である。信心自身が純化して、自力が翻ひるがえされて本願力に帰していくまでの歩みに、いろいろな往生がある。往生を一回するのではない。こういう見方をするわけです。

この三往生も、三願の展開も、解釈学者などは、いついつにはここまで来た。その次の段階はここまでと。例えば、比叡山時代は第十九願、法然門下は第二十願、流罪以降が第十八願だと。そういうふうに段階を分けるのですけれども、われわれが仏教に触れ、仏道を生きるときの内容は、段階的に表現を分けることができることもあるけれど、でも、いつも重なっているのです。一念同時に重なっている。

今の内容、今の思いに、過去の体験やら記憶

やらというものも張り付いているし、未来の可能性も入っている。今の一念というものの展開を開けば過去と未来とに分けられるけれど、あるのは現在だと。こういう考え方からすると、これは曾我量深先生がおっしゃっているのですが、三願の転入は一念の事実だと。

これはわかり難いことですが、わかり易い了解をして、一つ言ってみると、例えば、今、本願に帰して「南無阿弥陀仏」を信じていると。こういくら言ってみても、ちょっとした縁で、やはり自力の思い、自力の悩み、自力の迷いは起こる。それは、なくなるのではなくて、乗り越えているけれども、完全に切れているのではない。いつも縁と共に現象する。しかし、また間違っていたと気づいて本願に帰する。本願に帰する決断が一度もないと、自力のままがいている。でも、一度気がつくと、自力が起こってもすぐ乗り越えていける。こういう生活が本願力に乗じて生きて行くということなのだろうと思うのです。

■ 念々に死につつ生きる

第十九願は、人間の離れがたい自力の執心を教える。これをある意味で、本当にもう二度と立ち返らないというような信念になるのが、他力の信心である。では、それはいつなのかというと、今の一念の事実である。それを、死して生きる、「前念命終ぜんねんみょうじゆう 後念即生ごねんそくしゆう」（『真宗聖典』245頁、東本願寺出版部。〈以下、『聖典』と略記〉）と。念々に妄念に死んで信心よみがえに甦よみがえる。そういう時が今「南無阿弥陀仏」と共に与えられる。

何か図式化して、いついつまではこういうところ、いついつまではこういうところだと、そのようなわけには人間の経験はいかない。じわじわじわじわ生きて、じわじわじわじわ死んでいくわけでしょう。念々に死につつ生きている。信仰生活も念々に自力に死に他力に帰しつつ生きているのでしょうか。帰し終わったということはない。

だからいつでも念仏生活なのです。一遍称えたらそれでお終いというわけにはいかない。確かに親鸞聖人は、本願力に乗ずるところにもう生死を超えるのだ、もう二度と自力の妄念には返らないのだというように表現されることもありますけれども、人間はそうすっぱりといかないと思うのです。一度帰したらもう絶対他力がいい。理論ではそう言えるけれど、現実には、妄念の衆生である私どもは、一向に煩惱妄念から足が洗えない。泥沼のなかを生きている。でも念仏がいただける。気づくことはできる。間違っていたなと気づきながら歩んで行くのだと思うのです。

曾我先生は、本願の教えには完成はないのだ、入門はあるけれど卒業はないのだとおっしゃった。われわれは何でも早く卒業したいわけです。さっさと足を洗って、いい加減に卒業したいと思っている。けれどなかなか現実の人間は、生きている間は、やはり妄念が抜けない。それが凡夫ということです。凡夫であるから真実信心は得られないのかというと、そうではない。凡夫であるからこそ本願力に帰する。「煩惱具足と信知して 本願力に乗ずれば すなはち穢身すてはてて 法性常樂証せしむ」(『聖典』496頁)と。法性常樂を証するということと、煩惱妄念を生きているということとの境目に、本願力に乗ずることがあるわけです。そういうことが、親鸞聖人が明らかにされた往生する生活の内容だと思うのです。

■ 人間は立体的

第十九願位というのは他人事ではない。私どもが自力の執心をもって生きているところに、

いつも何かささやきかけてくる。自分が何か善いことをやって善人になりたい。悪人であると気づく反面で、善人になりたいという思いを離れがたいのです。それが人間のかわいらしいところなのかもしれませんが、実はそこに、本当に本願を信ずるということが、どこか曖昧になっていく。

この第十九願の問題は、そう簡単に三段跳びのように、いついつまで第十九願だった、いついつから第二十願、はい、今日からは第十八願ですと、そのようなわけにはいかない。一応開けば、そういう展望で歩んで来たと表現はできる。でも、現に生きている人間自身は立体的です。煩惱から足の洗えない人間が自力を完全に捨て去るなど、そのようなことはできないのです。凡夫ですから。

しかし、本願力に帰するということがもっている意味は、自力の立場は間違いだと気づいたと。気づいたから捨てられるかということ、捨てたつもりでもやはりくっついていてというのが、情けないかな、我らなのですけど、でも表現としては、本願力に乗ずるところにもう「無生法忍」を得るのだとまで親鸞はおっしゃる。そういう利益を煩惱の生活のなかにいただけるということを教えてくださっているのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は、下記のとおり公開（無料）で開催しています。

記

日時：2011年12月 休 会
2012年 1月10日(火)午後6時30分～9時
2月 6日(月)午後6時30分～9時
場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分
テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000
ご希望の方は、下記（京都・東本願寺出版部）まで。
TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211
<https://books.higashihonganji.jp>

善・自力の善うまるといふことを、おそるるなり。
 「難生」は、うまれがたしとなり。「故使如来選要法」といふは、釈迦如来、よろずの善のなかより名号をえらびとりて、五濁悪時・悪世界・悪衆生・邪見無信のものに、あたえたまえるなりとするべしとなり。これを「選」といふ。ひろくえらぶというなり。「要」は、もつぱらという。もとむという、ちぎるというなり。「法」は、名号なり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五五四・五頁)

語 註

【応身】 釈迦仏を中心とする、衆生救済のためにこの世に現われ、身体をもつて仏法を教えてくださる仏。

【化身】 本来は無色・無形の真理そのものである仏が、人々を教化するために、法身や応身以外の姿をとって仮に形を現したものの。

※親鸞は、「仏について四種あり」と『愚禿鈔』(聖典四二八頁)に記す。すなわち、法身・報身・応身・化身である。例えば、師である法然を詠んだ和讃に次のものがある。

「智慧光のちからより 本師源空あらわれて 浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう」(聖典四九八頁)

「阿弥陀如来化してこそ 本師源空としめしけれ 化縁すでにつきぬれば 浄土にかえりたまいにき」(聖典四九九頁)

試訳をめぐって

【原文】「恐」は、おそるという。真の報土に、雑善・自力の善うまるといふことを、おそるるなり。「難生」は、うまれがたしとなり。

【現代語訳】「恐」は、おそるということである。真実報土には、諸々の善、自力の善行をもつて生れ生まれぬ。それにもかかわらず、自力の善で生れるなどという考えがおこることをおそるのである。「難生」とは、生まれることが出来ないということである。

万四千の法門のことである。これらはすべて、有限なる自分の力をたよりとする、自力の善を勧めるものである。それゆえに、大慈悲の平等の真実報土には生まれぬと阿弥陀仏は選り捨てられるから、「恐難生」というのである。「恐」は、おそるということである。真実報土には、諸々の善、自力の善行をもつてしては生まれぬ。それにもかかわらず、自力の善で生まれるなどという考えがおこることをおそるのである。「難生」とは、生まれることができないということである。「故使如来選要法」というのは、仏法を疑い誹謗する者が増え、悪事がはびこる五濁の世であるから、悪を重ねずには生きられず、いつまでも自我にとらわれてまことの依り処を見いだせないわれらすべてのものに、釈迦如来が、あらゆる善の中から本願の名号ひとつを選び取って与えてくださったと知るべきである、ということである。これを「選」という。多くの中から選ぶという意味である。「要」は、専らということ、求めるということ、誓うということである。「法」とは、名号のことである。

『an'jali』第22号および

『現代と親鸞』第23号を刊行

このたび、『an'jali』第22号(写真上)、並びに『現代と親鸞』第23号(写真下)を刊行しました。

『an'jali』第22号では、リナックスカフェ代表取締役の平川克美氏、大阪大学大学院経済学研究科准教授の深尾葉子氏、筑波大学大学院人文社会科学部研究科教授の土井隆義氏、信濃毎日新聞編集委員の飯島裕一氏、京都大学大学院人間環境学教授の佐伯啓思氏、映像作家の森谷博氏、理化学研究所脳科学総合研究センター適応知性研究チームチームリーダーの藤井直敬氏、ポーランド国立アウシュヴィッツ博物館公認ガイドの中谷剛氏、新潟大学名誉教授の深澤助雄氏など、十名の専門分野の方々に、現代社会の課題や最先端での苦闘について、ご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第23号では研究論文のほか、評論家の芹沢俊介氏からの寄稿論文、「現代と親鸞の研究会」から、浦河べてるの家理事の向谷地生良氏の問題提起と質疑、「清沢満之研究会」から大谷大学文学部教授の加来雄之氏の講義と質疑、「教行信証」真仏土・化身土巻研究会」から大谷大学文学部教授の織田顕祐氏の講義と質疑。「第4回親鸞仏教センター研究交流サロン」から、山梨大学大学院医学部精神神経医学・臨床倫理学講座教授の香川知晶氏の発題と、大谷大学文学部教授の池上哲司氏のコメント。また、「公開講演会NO.1」から、哲学者でNPO法人「森つくりフォーラム」代表理事の内山節氏と本多弘之所長の講演。さらに、「親鸞思想の解明」から本多所長の問題提起(四講座分)を掲載しています。



現代と親鸞

第23号

発行所

親鸞仏教センター

〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1

TEL 03-5561-1111 FAX 03-5561-1112

E-MAIL anjali@an'jali.com

URL http://www.an'jali.com

『聖典』の試訳（現代語化）

「五濁惡時・惡世界・惡衆生」という文は、元は中国・善導大師の言葉に拠るものである。この文は『教行信証』に引文され（『真宗聖典』三四九頁）、また、同様の表現が他にも多数散見されることから、親鸞聖人がこの言葉をいかに大切にされていたかが窺える。

この後に続く「邪見無信」について、研究会で交わされた意見は、私自身非常に考えさせられるものだった。すなわち、「邪見」とは「邪（よこしま）な見かた」であり、自我を中心として「正しくものが見られない」ということ。「無信」とは、信じたいけれども信するものがないということ、ニヒリスティックな現在の時代状況に重なるということなのである。

その「五濁惡時・惡世界・惡衆生・邪見無信のもの」に「釈迦は、あらゆる善の中から弥陀の名号ひとつを選び、与えたのだ」と親鸞は言う。何よりそれは、成仏道を求めた先達、善導の「うなずき」であった。

（囑託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳 ⑬

原文

この報身より、応化等の無量無數の身をあらわして、微塵世界に無碍の智慧光をはなたしめたまうゆえに、尽十方無碍光仏ともうすひかりにて、かたちもましまさず、いろもましまさず。無明のやみをはらい、惡業にさえられず。このゆえに、無碍光ともうすなり。無碍は、さわりなしともうす。しかれば、阿弥陀仏は、光明なり。光明は、智慧のかたちなりとするべし。「随縁雜善惡難生」というのは、「随縁」は、衆生のおのおのの縁にしたがいて、おのおののところにまかせて、もろもろの善を修するを、極樂に回向するなり。すなわち八万四千の法門なり。これはみな自力の善根なるゆえに、実報土にはうまれずと、きらわるるゆえに、「惡難生」といえり。「恐」は、おそるという。真の報土に、雜

現代語訳

この報身から、量りきれない、数えきれないほど多くの応・化身を現していかなる世界にも隅々まで行き渡り、何ものにも妨げられることのない、智慧の光を放ってください。だから、この報身如来は尽十方無碍光仏という光である。形もなく、色もない。人間の存在自体が宿す無明の闇を払って、われわれが無始以来積み重ねてきた惡業にも障えられないことがない。ゆえに、無碍光というのである。無碍とは、妨げがないということである。そうであるから、阿弥陀仏は光明であり、光明は智慧のすがたであると知るべきである。「随縁雜善惡難生」という言葉の意味は次のとおりである。「随縁」というのは、衆生がそれぞれの縁に随い、それぞれの心のままに、自分から修めるさまざまな善行の功德を、極樂に生まれるための功德に転換することである。つまり、それは八

親鸞仏教センターの動き

（2011・8・10）抄出

■2011年

- 8・5 親鸞聖人ご命日のつどい
- 8・24 第15回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
- 8・29 第3回「尊号真像銘文」研究会
- 8・30 第130回英訳「教行信証」研究会
- 8・31 第10回清沢満之研究会
- 第45回（通算第96回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 9・1 機関紙「親鸞仏教センター通信」第38号を発行。
- 9・3 学会発表（春近敬研究員「近代真宗の『恩龍主義』に関する一考察—多田朋を事例として—」、常塚勝囑託研究員「近代仏教における世界観と社会観—真宗僧佐田介石を中心として—」日本宗教学会第70回大会・関西学院大学）
- 9・5 第16回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
- 9・9 親鸞聖人ご命日のつどい
- 9・16 第4回「尊号真像銘文」研究会
- 9・27 第131回英訳「教行信証」研究会
- 9・28 第110回清沢満之研究会
- 10・2 学会発表（花園一実研究員「親鸞における歴史的自覚—三木清遺稿「親鸞」の思想を手がかりとして—」第18回真宗大谷派教学大会・大谷大学）
- 10・3 第46回（通算・第97回）連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 10・6 第5回「尊号真像銘文」研究会
- 10・12 第132回英訳「教行信証」研究会
- 10・14 親鸞聖人ご命日のつどい
- 10・21 第17回「教行信証」真仏土・化身土巻研究会
- 10・27 第11回清沢満之研究会

現代と親鸞の研究会・第39回

人間知の傲慢、科学の欺瞞

—大地に足して共に生きる—

NPO 法人「使い捨て時代を考える会」相談役 槌田 劭



槌田 劭 氏

2011年8月26日、東京ガーデンパレス（文京区）において、NPO 法人「使い捨て時代を考える会」相談役である槌田劭氏をお迎えして「人間知の傲慢、科学の欺瞞—大地に足して共に生きる—」というテーマで「現代と親鸞の研究会」を開催した。氏は、長年、原子力力の虚構に代表される文明のあり方や、物欲に追われる現代の生活に対し、根源的な疑問を提示してこれ、いのちや人間の生き方について「大地に足した」思索と運動を展開してこれた。ここではその内容の一部を紹介したい。

（嘱託研究員 山本伸裕）

■ 原発事故を受けて

大地震後の原発事故を通して、これまで安全神話を振りまいてきた原子力行政や電力会社の嘘や欺瞞が明らかになりつつある。しかし、そうした事態を招いた責任は、原発を推進してきた一部の人たちや科学の傲慢さにあることはもちろんであるが、私たちも物質文明の享受について自己反省が必要である。この未曾有の悲劇は、大地に足して共に生きることを忘れた人間知の闇が招いた必然的な結果とも言える。

■ 崩壊するバベルの塔

大地に足する生活とは何だろうか。このことを自分自身の問題として反省するためには、まずは今日一日、はたして自らの足で土の大地を一度でも踏みしめるということをしたのだろうかと問うてみればよい。都会に住む多くの人たちにとって、大地を踏みしめない生活のほうが、むしろ当たり前になってきているのではないか。

人間のみならず、すべての生きとし生けるも

のは太陽の恵みを受け、大地から育ったものをいただいて命をつないでいる。生命とは、大地に支えられてはじめて存在するものである。にもかかわらず、人間知の生み出した文明は、大地に足して生きる生活を自ら奪い去ることで、野蛮状態から脱却し文明人になったと考え、そのことを誇ってきた。

だが、そうした生活のありかた自体が、この震災を期に根底から問われようとしている。これまで文明が振りまいてきた幻想は、今回の原発の惨事によって、破綻に瀕していることが明らかになった。現代のバベルの塔は、根本から崩れはじめていたのである。

■ いのちと宗教

釈尊は言っている。「大きないのちも小さないのちも、すべてのいのちに幸せであれ！」と。

仏教に限らず、宗教の思想というのは、無差別で多元的な価値を認めるものである。だが、仏教のなかからも自力に偏った思想が起こってきたように、ともすれば、己の愚かさ、自力の不可能性から眼を背けがちなのが人間というものであろう。大地に足して生きることを求めるのが本来の宗教的 眼 だとすれば、現在の「科学」の眼は、まさにその対極にあると言える。それは、文明のもたらした科学技術は、不可能なものはないと盲信のうえに成り立っているからで、「科学技術教」という名の超自力的邪教と言っても過言ではないのかもしれない。

悲観することと悲観的であること、あるいは絶望することと絶望的であると自覚することは、決して同じではない。創世記やギリシャ神話などにも見られるように、人類は、古来、宗教的な戒めを持ちながら生きてきた。文明社会は罪であり、そこには悲観的、絶望的な人間の

眼があることは確かだが、大事なことは、いたずらに悲観したり絶望したりすることではなく、罪を免れない人間社会をいかに生きるかということだったのである。そうした姿勢を保つには、あるがままに見つめること、自らの存在と生活とを侮ることなく、自己の愚かしさを含め見つめることから始めなくてはならない。

科学者の欺瞞

あるがままに見ないというのは、欺瞞に他ならない。原子力を「夢のエネルギー」と言い、原発を「原子力の平和利用」と言い募る言葉遣いは、まさにそうした欺瞞を象徴している。今回の原発事故で、原子力の専門家と称する人たちは、「想定外」という言葉を連発した。そもそも「想定外」というのは、科学者がいかに無力であるかを告白しているようなものだが、彼らがそうしたことを立派な顔をして平然と言えるのはなぜなのか。彼らは賢げにものを見ている。自分の愚にあまりに無自覚なのだ。

そもそも原子力は「科学」なのだろうか。「科学」は失敗を重ねることによってそのつど真実を垣間見、進歩してきた学問である。ところが、原子力は決して失敗が許されない。その意味で言えば、原子力は「科学」ではないとも言える。そうした原子力が「科学」の地位を確保するために生み出されたものが「安全神話」ではなかったか。

「科学」とは、「科【とが】」の学問でもあることを科学者は自覚しなければならない。英語では「科学」は science だが、この単語は conscience（良心）という言葉とともに無関係ではなかった。「科学者」の自信過剰は、science から「良心」が失われることから生じる。そして自信過剰は、大いなる欺瞞を生み、その結果「安全神話」なるものが作り上げられてきたのだと考えられる。

共生共貧～大地に足する生活を

現代の私たちの生活は、物欲の生活である。物欲の生活の背後には「金主主義」が張りついている。金さえ儲かればいいといった発想は、現生世代の利己主義、刹那主義を表していると言っている。

仏教は人間をむしばむ「三毒」の一つに「貪」を挙げる。「貪」という字は「貝」を

「今」にすると書くが、これは現生世代の利己的刹那主義を戒めていると考えられる。それに対して「貧」という字は「貝」を「分」かつと書く。貝＝食物を分かち生き方は、利己的刹那的な生き方の対極であろう。食べ物を分かち合うことは、未来世代も含めて互いに命を分かち合うということでもある。民主主義とは、そういうことである。

バベルの塔が崩壊しつつある今、真に反省し、目指すべきは、共生共貧という生き方ではないだろうか。あらためて人間知の思い上がり
と自らの「愚」を見つめ直し、大地に足する
「天恵自足的生活」を取り戻さなければなら
ないときがきている。（文責：親鸞仏教センター）

※植田勲氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第25号（2012年12月1日号）に掲載予定です。

植田 勲（つちだ たかし）NPO 法人「使い捨て時代を考える会」相談役

1935年京都市生まれ。京都大学理学部化学科卒業。同大学院を経て、米国へ留学の後、京都大学工学部助教授（金属物理学）。その後辞職。元京都精華大学教員（環境社会学）。1973年「使い捨て時代を考える会」を設立、現在は相談役。様々な実践活動を通して、「現代」を考え、未来の可能性を模索している。

著書に、『共生の時代—使い捨て時代を超えて』、『破壊にいたる工業的暮らし』、『未来へつなぐ農的暮らし』、『未来へ生きる食を求めて—わが家の食卓十二ヶ月』、『脱原発・共生への道』、『自立と共生—地球時代を生きる』、『共生共貧・21世紀を生きる道』（以上、樹心社）、『工業社会の崩壊』（四季書房）、『化学者植田龍太郎の意見』（共編・化学同人社）、『農の再生・人の再生—産直運動をめぐる』（人文書院）、『歩く速度で暮らす』（太郎次郎社）、『地球をこわさない生き方の本』（岩波書店）、『共感する環境学—地域のひとびとに学ぶ』（共編・ミネルヴァ書房）、『水と暮らしの環境文化—京都から世界へつなぐ』（共編・昭和堂）など多数。



「現代と親鸞の研究会」（於：「東京ガーデンパレス」）

第 5 回「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催 (2011年 6 月 30 日)

親鸞仏教センターでは、これまでの各分野の有識者との交流が、当センターと有識者との間だけに留まらず、有識者相互間の研究交流へと展開し、そこから新たな視座を得ることを目指し、「親鸞仏教センター研究交流サロン」を開催している。

第 5 回目となる今回は、「世代連鎖とアイデンティティ—ジェネレイショナルサイクルのなかで—」をテーマに、京都大学大学院教授の西平直氏 (写真・左) を発題者として、大正大学教授の弓山達也氏 (写真・右) をコメンテーターとしてお招きし、さる 6 月 30 日東京国際フォーラム (東京都千代田区) を会場に開催した。

西平氏は、異世代との関係のなかで、アイデンティティがそのライフステージごとに問い直されていくという問題を、エリク・エリクソンのジェネレイショナル・サイクルの考え方でおさえられ、「育てられた者」が「育てる者」になるということと、エリクソンが語っておもたなかった「看取る者」から「看取られる者」になっていく連鎖について展開して語られた。そして、われわれが自分の人生を大切にしながら前後の世代をケアするという課題をもつことの必要性、あわせて、将来世代の権利を守る課題について、核廃棄物や天然資源の利用などの具体例を挙げて話された。最後に「現存する世代を超えたつながりを消し得ないものとしたときに、われわれはどういう課題を背負うことになるかという問いを共有していきたい」と述べられた。

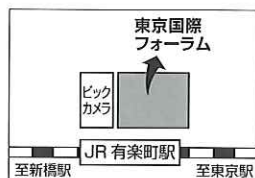
続いて弓山氏からは、西平氏の話を受けて、異世代交流の難しさ、この考え方が家族イデオロギーに絡めとられてしまうと危惧する西平氏への提言、また、震災後の社会像について大正大学が設立した NPO 法人での取り組みや、震災後の学生たちとのボランティア活動などの具体例を挙げられて、論点を確認しあいながら丁寧にコメントをいただいた後、約 30 名の参加者で意見交換がなされた。

※内容は、「現代と親鸞」第 24 号 (2012 年 6 月 1 日号・1 冊 1,200 円) に掲載の予定です。



親鸞仏教センター公開講演会 2011 のご案内

- ①テーマ 「言葉」のリアリティー——秋葉原事件が問いかけるもの——
- ②日時 2011年12月19日(月) 午後6時～9時(受付:午後5時30分)
- ③会場 東京国際フォーラム G701
- ④講師 講演 中島 岳志 氏 (北海道大学大学院法政研究科・公共政策大学院准教授)
※講演後に研究員とのディスカッション
- ⑤聴講料 無料
- ⑥定員 200名(予約は不要です。先着順で定員になり次第、締め切ります)
- ⑦後援 大谷大学
- ⑧問い合わせ 親鸞仏教センター 公開講演会 2011 係まで



親鸞仏教センター研究員と読む——公開輪読会 2011 「伝承と現在」 参加者募集中!

2011 年度の公開輪読会は、東京大学仏教青年会館 (文京区・本郷) において、「伝承と現在」をテーマに、下記のとおり開催します。当センターの研究員と一緒に仏教の聖典をひもとく、自己とは何か、人間はなぜ悩むのか、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教の言葉に、現代を生きる力を見いだしていきたいと思ひます。

初めての方もどうぞお気軽にご参加ください (以下の詳細は、開催日程順です)。

■「真実心の探求—『教行信証』『信巻』を読む」(全 4 回)

趣旨文 親鸞思想の核心は信心にある。それは私たちが日常で使用する信頼・信用などの言葉とはまったく異なり、かえってそのような私たちの欺瞞性をあばき続ける如来の真実心に他ならない。今回は『教行信証』『信巻』を通し、この真実心をめぐる展開される、親鸞の思索の道程に触れていきたい。

日 時: 2011 年 12 月 1 日(木)、8 日(木)
15 日(木)、22 日(木)
いずれも午後 6 時 30 分～8 時 30 分
担 当: 花園一実 (はなその かすみ) 研究員
テキスト: 『教行信証』『信巻』
(『真宗聖典』東本願寺出版部) より抜粋
資料代: 500 円 (4 回分)



■「『伝灯』と精神主義—『精神界』を読む」(全 4 回)

趣旨文 明治後期の雑誌『精神界』所収の清沢満之の論文を講読する。清沢とその門弟たちによって喧伝された〈精神主義〉の思想を手がかりとして、時代と伝統との狭間で、仏教がいかにその在り方を模索したかを読み解いていきたい。

日 時: 2012 年 1 月 13 日(金)、20 日(金)
27 日(金)、2 月 3 日(金)
いずれも午後 6 時 30 分～8 時 30 分
担 当: 春近 敬 (はるちか たかし) 研究員
テキスト: 『精神界』所収論文
(『清沢満之全集』岩波書店) より抜粋
資料代: 500 円 (4 回分)



■「信の伝承—「和讃」に見る聖徳太子」(全 4 回)

趣旨文 親鸞聖人が、当時の「うた」という形式で、平易な言葉で語られた聖徳太子像は、現代のわれわれが考える実証主義的な歴史認識とは一線を画している。聖人が受け取り伝えようとした太子像とはどのようなものなのかを確認することで、われわれにとつての「伝」ということの意味について考えたい。

日 時: 2012 年 2 月 8 日(水)、15 日(水)
22 日(水)、29 日(水)
いずれも午後 6 時 30 分～8 時 30 分
担 当: 内記 洸 (ないき たけし) 研究員
テキスト: 『正像末和讃』中、「皇太子聖徳奉讃」
(『真宗聖典』東本願寺出版部) より抜粋
資料代: 500 円 (4 回分)



■お申し込みと問い合わせ

参加ご希望の方は、親鸞仏教センター公開輪読会 2011 係までご連絡ください。参加費は無料ですが、資料代をご負担願ひます。定員 35 名。連続 12 回の講座ですが、途中からの参加も受け付けます。

●すべての問い合わせ先

親鸞仏教センター 〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7
TEL 03-3814-4900 FAX 03-3814-4901 E-mail shiran-bc@higashihonganji.or.jp

■会場

東京大学仏教青年会館 2 階ホール
(文京区本郷三丁目・日本信販ビル 2 階)

東京メトロ丸ノ内線「本郷三丁目」駅徒歩 3 分
都営大江戸線「本郷三丁目」駅徒歩 1 分

